

魁！イエーガーズ高校

聖獅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔の漫画、魁！クロマティ高校のパロディです。

が、女性陣がレギュラーですので独自展開となります事、ご了承ください。勿論、個々人の性格設定かなりいじってます。

セリユー：座右銘「善、即、行」プラス被害者気質

クロメ：お菓子好きプラス責任転嫁の達人(?)

コロ：謎な犬

エスデス：変態淑女

自分の中では愛すべき三馬鹿トリオ(と一匹)

彼女達の愚駄愚駄な話です。続くかもしれません。

目次

魁！イエーガーズ高校！	1
女子高生達の割と暇な日常	8
渡る世間は鬼ばかり（約1名）	19
ぶたれたのはクロメ	30
無敵は素敵	37

魁!イエーガーズ高校!

クロ「セリユ一、聞いて聞いて!」

セリ「なに?」

クロ「また凄い悪い奴見付けたよ」

セリ「またあ!?こないだはこの人、高校生ってありえなくない?な覆面レスラーいたけど、ただの恥ずかしがり屋の良い人だったし。ありえなくヤバい不良って、ただのリーゼントがちよつとあれな人だっただけだし、あんたの言う悪い人って絶対違うでしょう!」

クロ「今度は本当だから来てよ!」

セリ「はいはい」

3年S組を覗く二人

クロ「見て、あの青髪の女!」

セリ「スレンダー美人ね・・・あの人がどうしたの?」

クロ「とんでもないワルよ!」

セリ「どこが?」

クロ「・・・!?!セリユー・・・あたしとあんたは仲間だと思つてたのに、裏切つたわね!」

セリ「はあ!?!」

クロ「あの巨乳を見てなんとも思わないの私達の敵よ!まさか・・・あんたの大きくなつたの?」

セリ「・・・アホ!・・・そりやちよつと悔しいけど、もう帰るわ」

クロ「何言つてんのよ、あんの女絶対裏で男を手玉に取つたり、酷い拷問してたりと悪い奴に決まっているわ」

セリ「はいはい、そろそろ授業始まるからあたし帰るわ」

クロ「あ!?!」

セリ「なに?」

クロ「あの女帽子かぶっている」

セリ「そりやうち制服自由だし、授業中とれば良いんじゃない?」

その時、謎の女は後ろ髪をかき上げる・・・長い髪がたなびき絵になっている。

セリ・クロ「おぉ~~~~~んん?!!」

髪で隠れていたがその女の首の後ろに大きなネジが刺さっている。

セリ「……ネジ?」

クロ「ネジね」

セリ「なんでついているの?」

クロ「本人に聞いたら?」

セリ「聞けるわけないでしょ、なにか変わったアクセサリかもしれないし」

クロ「そんな事より、授業始まるわ、行くよ」

セリ「え?ちよつとあんた」

昼休み

クロ「私達はあの謎の女を追う事にしたのであった」

セリ「面倒臭いなもう」

クロ「あの女の正体を暴いてやるわ」

セリ「あたしもう帰って良い?」

クロ「あたし達、一緒に死のうと誓い合った仲じゃない?」

セリ「一人で死んで」

クロ「酷い!」

セリ「ん?ネジに手をやったわ」

謎の女は首のネジを取り、他の生徒にそこに水筒の水を入れるように頼んでいる。

セリ「……………」

クロ「……………」

謎の女「ふう、やはり大雪山系の水は旨いな」

その後、腹から出した電源コードを教室にコンセントに繋げている。

セリ「……公共の電気を勝手に私物化は駄目ね……」

クロ「言う所、そこ!？」

セリ「ええ、うんまあ……」

クロ「じゃ言つて来なさいよ!」

セリ「嫌よ!あの人色んな意味でなんか怖そうだもん!」

クロ「意気地無し!」

セリ「ならばクロお願い!」

クロ「……あの犬、学校にリュックサックつて言つてるけど、いずればれると思う

わ

クロ「きゅきゅきゅーい!」

セリ「判つた、クロ、言ってくるのよ!」

クロ「きゅい!」

クロは充電中の謎の女の所に注意しに行く

謎の女「?」

コロ「きゅきゅーきゅきゅい!」

謎の女「お前どこから紛れ込んだんだ、おーよしよし」

コロ「きゅいきゅい／＼／」

戻って来るコロ。

コロ「きゅい! (ドヤ)」

セリ「違うわよ!なに撫でられてんのよ!」

コロ「くっ・・・恐ろしい女ね」

セリ「あのさ・・・」

コロ「なに?」

セリ「あたし恐ろしい事に気付いたんだけど、誰もあの人の事、不思議におもってな
くない?」

コロ「言われてみれば・・・」

セリ「人間なのあれ?」

コロ「・・・たぶん違うんじゃない?」

セリ「だよね」

コロ「でもさ、世の中広いからああいう人、秋葉辺りに行けばいるんじゃない?」

セリ「そういえばああいう人見た事あるような・・・」

謎の女「ふう・・・充電完了、これぐらいにしろとか、ダイエットも必要だからな」
クロ「なに？あの女、ダイエット？あたしに喧嘩売ってるわ・・・これでも低カロリーのお菓子で我慢してるのに」

セリ「いや、違うでしょそこ。今明らかに充電完了って言ったよね、あの人、人間じゃないよね？」

クロ「ロボット？アンドロイド？・・・のび太のくせにダイエットなんて生意気なのよ」

セリ「いやそこロボットのくせにでしょ？」

クロ「いや判んないわ。22世紀の丸顔ロボットだつて太るのよ？」

セリ「あんたどんだけ漫画好きなのよ？」

クロ「きゅいきゅいきゅい」

セリ「え？自分の頭撫でてくれるロボットに悪いロボットはいない？」

クロ「お黙り！（ビシッ）」

クロ「・・・きゅい・・・」

クラスメイトの一人が謎の女に話しかけている

レオーネ「ねえ、エスっち」

エス「なんだ？」

レオーネ「前からさ・・・、こんな事言うとおんた傷付くと思つてたから言わなかつたけど」

エス「お前らしくないな、言いたい事があるならばつきり言え。私とおんたの仲だろ」
セリ・クロ『!!そうだ・・・そこだ言え・・・!』

レオーネ「あのさ・・・その胸元のタトウ？不良っぽいよ」

エス「ここ、これくらい冒険しても良いだろ！」

セリ・クロ「違うだろーーーーー！」

女子高生達の割と暇な日常

コロ「きゅきゅいきゅういいいきゅきゅい（訳・前回と今回の間の粗筋！エスデスが仲間になりたそうにこちらを見てたので、「はい」を選択した、以上）」

セリ「コロ、何言ってるの？」

コロ「ああー暇ねー」

その時、教室のドアが開き、

エス「お前達、学園の悪者を追っているそうだな？・・・そういう輩を見付けたぞ！」

セリ「・・・」

コロ「・・・あたし達ねえ、もうそういう遊び飽きたから止めたの」

エス「良いのか？お前達そんな事で！一度立てた目標を途中で止めてどうする？」

コロ「・・・どうする？」

セリ「はあ・・・どうせまたいつものパターンだと思うけど暇だし付き合おうか？」

体育館の休み時間中にバスケットをしている男子学生達。

その出入口でこっそり(?) 覗く怪しい3人と1匹。

エス「・・・・・・・・」

セリ「・・・・・・・・」

クロ「・・・・・・・・」

コロ「・・・・・・・・」

セリ「ねえ？あの中の誰？」

エス「あ、ああそこに居るだろ？茶色髪の・・・・・・・・／／」

クロ「ああ、あの？今ロングシユート決めたね・・・・・・・・へえ凄い」

セリ「おお・・・でもそれでどの辺が悪い人なの？」

エス「私達より一年下なのだ」

クロ「それで？」

エス「え？ああいや、そのとにかく観察していれば化けの皮が剥がれるから見ている」

セリ「例えばどんな？」

エス「一見ああいう風に普通の生活を送っているが、実は闇の殺し屋かもしれないだ

ろ？」

クロ「何言っているの？あんたガンガンジョーカーの見過ぎ」

セリ「テレビの見過ぎだよ」

コロ「きゅいきゅい！」

エス「うつ……」

放課後

2年N組

部活の為、教室で着替えをして出ていく例の男子生徒

誰もいなくなつた後、その教室に入る3人と1匹

エス「この服だ、間違いない。……ふふふ、タツミ君のだな。……うふふ／＼／＼」

セリ「……あんた何してるの？」

エス「あ、これはその、ああ……その敵を知らばなんとやらと言うではないか？」

コロ「へへへそへへへ」

セリ「実際、彼の何が悪い訳？……なんか面倒臭くなって来たから帰って良い？」

エス「ま、待て！」

コロ「大体、其の人の何が悪い訳？好い加減言いなさい？」

エス「……こ……」

コロ「え？なに？」

エス「わ、私の心を盗んだ悪人だ……／＼／＼」

セリ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クロ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

コロ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

セリ「帰ってカリオスト口の城っていう映画見よう」

クロ「暇だからあたしも観る」

コロ「きゅい」

エス「ま、待て、私を一人にするな、一人じゃ恥ずかしくてストーカー・・・・・・・・じゃない

彼をこっそり見守れないだろうが！」

セリ「・・・・・・・・ここでさっきから握りしめてる彼のシャツどうするの？」

エス「こ、これはその、汗をかいていたからな、後で洗って返す。その為には替えと

して新しいシャツも用意しておいたぞ、うむ！」

クロ「ふくふくさん、用意が良いだね」

セリ「彼の許可は取ったの？」

クロ「取ってる訳無いよね？」

エス「う・・・・・・・・いい、良いだろ？別に盗む訳じゃない。あ、後で必ず洗ってこっそり

返すから」

クロ「・・・・・・・・どうするこの人？」

セリ「犯罪といえば犯罪だけどね」

クロ「恋する人って多かれ少なかれ犯罪的な事するかもね」

セリ「まあ、実際盗むけども替えも用意してるし・・・」

クロ「見逃すの？」

セリ「今回一回だけなら」

エス「う、うむ、一回だけだ」

セリ「んじやめでたしめでたし、帰ろ帰ろ！」

クロ「同じく！」

クロ「きゅい！」

※良い大人も悪い大人の方もエスデスの真似をしてはいけない

部活後、

タツミ「あれ？俺のシャツなんか新しくなっているような・・・？」

ラバツク「は？気のせいだろ？・・・もう遅いし帰ろうぜ」

翌日

クロ「暇だねー」

セリ「料理同好会はどうしたのよ？」

クロ「あれは毎日ある訳じゃないの」

セリ「ところであのエスデス、本当何者なんだろうね」

クロ「・・・そうよ、うっかり忘れてたけどあの何者よ？」

セリ「たぶんロボットの何かだよな？」

クロ「そうよ・・・絶対それ的な何かよ・・・よし思い切つて聞いてみるわよ！」

セリ「え?! 本当に聞くの？」

クロ「そうよ、リベンジ!!」

エス「ああお前達か、昨日の事は内緒でな?・・・ところで私に何か用か？」

クロ「ええ、セリユーがあんたに話があるつて」

セリ「そうそう・・・つて、ええええ!!?」

クロ「ほら早く!」

セリ「ええええ、ちよつとおお!!」

クロ「女は度胸! ポテチはコンソメが一番よ!」

エス「いや氷結味だ!」

セリ「そこはのり塩でしょ・・・ああいやいや・・・」

クロ「きゅいきゅい!」

セリ「う、うん……エスデス、あんたひよつとして……アンドロイド……？」

クロ『よし言った……』

エス「……!？」

セリ「う……やっぱり……」

エス「……ふ……いつかばれる日が来ると思っていた……かつて私は喧嘩早くてな。それに伴い仲間も出来たが高校に入り大人しくして生きようと決めた」

クロ「……」

エス「当時の私に付けられた仇名が鋼鉄氷の女（アイスアイアン・レディ）だ」

セリ「え？ アンドロイドは……？」

エス「ん？ だから、鋼鉄のように堅く冷たい女だからアンドロイドと言ったのだろう？」

クロ「……ちよつとご本人なんで気付いてないの？」（小声）

セリ「……天然だとは薄々思ってたけどやっぱり……」（小声）

クロ「きゅきゅい！」（小声）

エス「ん？ 何をそこでこそ話している？」

セリ「……あのーエスデスさん？ 他の人とちよつと違うかなーって思った事ない？」

エス「他人とか……ふむ、過去のやんちゃな事をしていた時の事以外特には無いか

な」

クロ 『駄目だこりや!』

セリ 「クロメ、あたしは頑張ったわ・・・」

クロ 「あなたの努力は見届けたわ・・・もうゆつくりお休み」

セリ 「クロ、あたしなんだか眠いよ・・・」

クロ 「きゅい」

クロ 「真っ白に燃え尽きて良いよ」

エス 「？」

翌日

クロ 「・・・いやあー参ったわあれは・・・」

セリ 「もう手の施しようが無いね・・・」

クロ 「あの変態ストーカーロボット、自分は人間だと思いきこんでいるのね」

セリ 「もう良いんじゃない・・・本人がそれで良いなら」

クロ 「確かに・・・あの女が何処かの科学班が極秘裏に造った都市破壊型アンドロイ

ドとかでも、あたし達JKにはドーにもならないからほっとこう!」

セリ 「そだね、・・・あー今日の小テストの準備した?」

クロ「まだ・・・昨日彼氏と遊んでたから・・・」

セリ「ええええええええ!!?!?」

クロ「わっ!うるさ!!」

エス「話は聞かせて貰ったぞ!!」

クロ「ぎゅい!!?」

セリ「うわっ、こつちからも来た!」

エス「クロメ、お前には彼氏が居たのか、ほうほう!」

クロ『うわぁ・・・面倒臭いのが来た・・・』

セリ「・・・どっから聞いてたの?」

エス「うむ、丁度用事があつて通り掛つた時、クロメに彼氏が・・・と聞こえたんだな」

セリ「そうそう、それよりクロメ!彼氏が居たなんていつ出来たの?」

クロ「・・・近所の幼馴染で・・・高校は別々になつちやつたけど、そのお向こうはどう思っているかはつきり判らないけど、遊びに一緒に行ったりしてるの!」

セリ「へーはーふくくん、親友のあたしに今まで黙つてたなんて・・・ああ、ウエイブ君の事か・・・!」

クロ「ち、ち、ちち違うわよ・・・あいつとはただの腐れ縁で・・・」

セリ「そうだったんだ・・・にししし、ふくくくくん、今度彼にクロメの事どう思っているか聞いてみよう！それと、クロメに彼氏が出来たって、ふふふ」

クロ「・・・セリユー聞いたらただじゃ置かないから！」

セリ「良いじゃない！この際、はつきりさせて玉砕されちやいなYO！」

クロ「あんた・・・、今とてもつなく殺意が湧いた」

エス「・・・そうか幼馴染か・・・それだけ長い間の付き合いならお互いの事もよく判っているのだろう？」

クロ「そ、そうよ！互いに何も言わなくてもあいつと私とは通じあっているんだから」
エス「なら頼む、教えてくれ！どうやってたらタツミと仲良くなれるか！」

クロ「ええ、・・・『仲良くなる以前にあんたアンドロイドでしょ・・・セリユーなんとか言いなさいよ』」

セリ『無理無理、言える訳無いじゃない！』

エス「師匠よ！」

クロ「うっ・・・『悪い気はしない・・・』」

エス「・・・お願いします！」

クロ「・・・ふっ・・・仕方ないわね、これからあたしの言う事を守りなさい！但し楽じゃないからね・・・」

エス「判った！」

クロ「駄目よ、返事は〃サー、か〃イエツサー〃よ」

セリ『なんかまたややこしい事になったなあ・・・』

担任・ナジエンダ「こら、お前達、いつまで話している！エスデスは自分のクラスに戻れ！」

渡る世間は鬼ばかり (約1名)

放課後 家庭科室

クロ「良い？男は胃袋掴んでなんぼよ！」

エス「イエス、ママ！」

セリ『この人(?)も変な所で真面目だなあ・・・』

クロ「包丁の使い方は・・・ああ、それじゃ駄目、手で切るんじゃない、腰で切るように・・・そうそう、その方が繊細に包丁捌きになるの」

エス「イエッサー！」

クロ「はい、これちよつと味見してみて！」

エス「・・・」

セリ『あれ？普通に口から食べてる？どうやって消化してるんだろ？』

エス「ちよつと塩辛い・・・」

クロ「ここはもう少し砂糖を入れて・・・味覚ももっと尖らせて！・・・インスタントやスナック菓子ばかり食べてたら味覚が鈍感になるから、薄味の物や色んな物を食べて味覚を鍛えるのよ！」

セリ「それ、あんたが言う！」

クロ「外野は黙れ！それよりあんた部活どうしたのよ！」

セリ「今日休み」

セリ『意外・・・、クロメも結構ちゃんと教えられるんだ・・・』

クロ「もぐもぐばくばく」

失敗作を処理しているクロ

その後、エスデスは真面目にクロメから料理を教わっていたのだが・・・。

特訓して数日後

クロ「さて、今日は作ったお菓子にデコレーションするわよ！」

エス「イエス、マスター！」

セリ「うんうん、ここ数日で結構サマになってきたね・・・凄いな、のみ込み早いし」

エス「いやいや」

クロ「あたしの教え方が上手いのよ・・・っで、出来たお菓子の上に文字を書くのよ」

エス「ど、どう書けば良い？」

クロ「こう書けば彼もイチコロよ！」

“あなたのエスデスより”と書いてしまう……。

セリ「……………」

クロメを見るセリユ一

クロ「……………」ギロツ

セリ「……………」

エス「…………、こ、これで良いのか？マスター？」

クロ「そう……、これで良いのよ。さあ、エスデス、あんたには自分がやりたい事はとりあえず出来るように教えたわ……後はその思いの丈を彼に思いつきりぶつけてきなさい！」

エス「ううう……、有難う。マスター……私は必ずタツミと……」

クロ「さあ、早く行ってきなさい……良い報告を待つてるわ……」

エス「うむ、では行って来る……世話になった、マスター！」

そう言つて、エスデスは出来たお菓子を持つて家庭科室から出ていく。

クロ「もぐもぐばくばく」

セリ「……………」

クロ「……………ぶぶぶ、あはははははははは！」

セリ「クロメ・・・、あんた・・・」

クロ「あーおかしー、お菓子なだけに・・・、ってなんちやって！」

セリ「くつ・・・、あんたあんなの貰ったら普通、面識の無い相手なら退くに決まっていますよ！」

クロ「何言ってるのよ！当たり前でしょ、そんなの？ぷぷぷくくく」

セリ「あんたねえ、少しは見直してたのに・・・」

クロ「あたしはねえ、人生・・・あいやロボ生？アン生？まあ良いやとにかく、人と言う事を正しいか間違っているかを養うきっかけを教えただけよ・・・だって、あのロボット、意外に世間に疎いんだもん・・・それが面白くっておかしくって、あはは」

セリ「あんた・・・、ウェイブ君に今の事全部言ってる！」

クロ「!!??!馬鹿言ってるじゃないわよ・・・そんな事されたらあいつ怒るに決まってるじゃないの！」

セリ「じゃあ、早く止めきなさいよ！」

クロ「ぶぐくく・・・、この借りはでかいわよ！」

セリ「はよ行け！」

クロ「もぐもぐ」

エスデスを追い掛ける二人と一匹

コロ「きゅいきゅい！」

セリ「え？こつちから匂いがするって？」

屋上

セリ「あ、居た！」

クロ「？しつ、ちよつと隠れて！」

セリ「え？」

その屋上にツインテールの桃色髪的女子生徒からタツミはお菓子を貰って何やら談笑している。

そこから少し離れた位置にエスデスは化石になっていた。

セリ「・・・・・・・・・・」

クロ「・・・・・・・・・・」

コロ「・・・・・・・・・・」

セリ「帰ろう・・・・・・・・」

クロ「エスデス、その、なんかゴメン・・・」

コロ「・・・・・・・・・・」

二人と一匹は今はそつとしておこうとエスデスに何も告げずに帰った。

コノエ家居間

菓子を食べながら居間に寝そべって漫画を読んでいる。

クロ「ポリポリ」

アカ「クロメ・・・、だらしないぞ。食べるか読むかどっちかにしろ！」

クロ「うるさいなあ、お姉ちゃんは・・・小言ばかり言っていると小皺が増えるよ」

アカ「なんだと！」

ブドー「今、帰ったぞ！」

アカ「お父様お帰りなさい！」

クロ「お父さまお帰りさない！」

背筋を正している

アカ「・・・・・・・・」

コノエ家仏壇前

ブドー「トキコよ・・・娘達は元気に育っている・・・草葉の陰で見守っていてくれ」

居間

アカ「何故お前は父様の前では良い子ぶるんだ!？」

クロ「良いじゃない別に！」

アカ「私はお前のそういう所が嫌いだ！」

クロ「お姉ちゃん是要領が悪いんだよ……そんなんだから彼氏の一人も出来ないんだよ！ああ……お姉ちゃんはお父さん大好きっ子だったね、くすくす」

アカ「くっ……今日と言う今日はクロメ、許さん！」

クロ「ふっ……返り討ちだよ」

ドツタンバツタン

仏壇前

ブドー「……はあー少々元気になり過ぎているが……年頃の娘とはこんなものなのだろうか？」

アカ「少しは淑やかにしろ！」

クロ「お姉ちゃんには言われたくない！」

アカ「ぎやつ！」

クロ「ふぎや！」

拳骨を食らう二人。

ブドー「静かにしろ！お前ら！」

翌日

クロ「なーんて事があつてさ。お姉ちゃんはからかい甲斐があるなあ、ふふふ」

セリ「ああ・・・、アカメさん？家でそんな事になつてんだー。生徒会の役員もしてんだっけ？真面目な人だよなー」

クロ「人から頼まれたり、責任押し付けられて要領が悪いだけだよ」

セリ「ふくくん。でもお姉さんフアザコンつて本当？」

クロ「うんそう、二人とも真面目だから気が合うんじゃない？お姉ちゃんつたらお父さんの為なら死ぬるみたいな感じなんだ・・・でもまあ、あのお父さんに匹敵する渋い人なんて周りにそうそう居ないからお姉ちゃんの気持ちも少しは判るかな」

セリ「・・・それで、あんたはどうなの？ウェイブ君と？」

クロ「え？ええ、あたしは・・・」

教室のドアが開き、

セリ「？」

エス「・・・・・・・・・・」

クロ「・・・・・・・・・・」

エスデスは何も言わず、教室のコンセントの所へ行き充電し始める。

エス「タツミ君タツミ君タツミ君(r y)……………」

クロ「……なにあれ？」

セリ「なんか……とんでもない事になってるんだけど……」

コロ「……………」

クロ「なに？なんか構って欲しいオーラ全開なんだけど、……ここはやっぱ放置すベ
きっ？」

セリ「あんたは鬼か!?でも……確かに……あんまり関わりたくないな……昨日
の事、可哀想だとは思うけど……」

クロ「どだい、ロボ子が恋愛なんて無理があつたに決まってるのよ！」

セリ「クロメ！」

その時、エスデスの充電が過充電となった為か、体の周りに火花が散る！

クロ「……なにあれ？」

セリ「ちよつと、ええ？やばいつてあれ？」

周りのクラスメイトが何事かと思始める。

クロ『ああなつても誰もエスデスがロボ子とか言わない……?』

セリ「なにぼーつとしてんのよ……とにかく、エスデス大丈夫？」

エステスの頭からボツと黒い煙が出たかと思うと、直後に倒れる。

クロ「あちやー、ナムー……」

セリ「つて何言つてんのよ！早く助けなと！」

クロ「どこ連れてくによ？車の整備工場とか？」

セリ「んな訳無いでしょ！保健室よ！」

クロ「ロボツトが保健室へ？聞いた事無いわ」

セリ「とにかく、そつち持つて！」

クロ「きゅきゅい！」

保健室

スタイリツシュ（以下スタ）「はい、そんなの後は睡つけとけば治るから……、保健室は休憩室じゃないのよ、はい行った行った……あら？」

セリ「先生、ちよつと倒れちやつてお願いします」

スタ「……エステス……、判ったわ。あんた達その娘、ちよつとそこに寝かせて」

クロ「先生はロボツトの診察も出来るんですか？」

セリ「クロメ！」

スタ「……」

クロ 『この人・・・、何か知ってる？・・・』

ぶたれたのはクロメ

「あんた達には話しておいた方が良さそうね……」

二人と一匹は固唾を呑んでスタイリツシユの言葉を待った。

「クロメ、お菓子食べるんじゃないわよ」

「良いじゃん？盛り上がりそうだし」

「あれは……昔……えくと何年前……と、とにかく、あの頃アタシは学会に罨に嵌められて……つらかったわ、復讐しようと誓ったのよ……」

当時は回想するスタイリツシユ

『ジョニー！アタシを置いてかないでー！』

『モウ君トハヤツテナレナイYO！』

「……それからアタシは自棄になつて必死に研究に打ち込みあの子を完成させたのよ」

「なるほど……先生もそんな事が……つてええ？学会は？ジョニーつて誰ですか？」

「ほぐほぐ、あのエスデスが生まれるのにそんな壮絶な、もぐもぐ……」

セリユーは真顔でクロメの顔を覗き込むが……。

「とにかく、そういう訳だからこの子と仲良くしてよね?」

「よ、……良く判りませんが判りました……」

「あ、一つ言い忘れてたわ?この子の馬力129・3あるから下手に喧嘩すると大変だから気をつけなさいね?」

「は!?!」

「それと小型原子炉内蔵してるから、壊しちゃ駄目よ……場合によりけりだけど壊したらこの辺一帯……ドカーンって、皆死んじゃうわよ?」

「は……はあああああ???なんてもの作るんですか!?!」

「もぐもぐ……やっぱりウェイブの手作りは磯臭くて美味しい……」

「先生……ええ?だ、だいじょうぶなんですか?色々と?」

「大丈夫よ、廃棄物のプルトニウムは海に……じゃなくて、体内でぜんぶ浄化されてるから」

「……ロストテクノロジー……」

「ろすとてくのろじー?へえ……って、え?今喋ったのコロ?」

「……きゅい?」

「・・・まあ良いや、でもそれ学会に発表すれば凄いいんじゃない？」

「そうそう、あとメンタルが傷付いても駄目よ？過度なストレスが掛かった場合、自己同一回路安定の為、自爆するから・・・そうね、例えば失恋とか」

「え？は？自分を守る為に、自爆って全然意味判りませんよ!!」

「リアルな乙女を作ろうしたらこうなったのよ？仕方ないでしょ!」

「いやいやいや？全国の乙女に謝って下さい！そんな破壊兵器造らないで下さいよ!」

「セリユ、それはちよつと失礼よ!」

「お菓子食べてただけの人には言われたくないよ!ああ・・・もうどうしよう・・・」

「青春は悩む為にあるのよ？じゃあ、後はこの子の事宜しくね♪」

「え？投げっぱなしですか!？」

そこでエステスが目を覚まし起き上がる。スタイリッシュとセリユ、クロメ、コロを確認し、

「む・・・ここは？マザー・・・そうか、お前達、私をここに・・・」

「あら、あんたやつと気が付いたのね。もう大丈夫?」

「う・・・ああ・・・まあ大事無い・・・」

「マザー……? ファザーじゃないんだ?」

「む!? 何か言った?」

「いいえ、何も!」

セリユー達のやり取りを尻目にクロメはエスデスをフォローする。

「ま、大丈夫よね? 失恋何て明日になれば忘れれるよ? ま、あたしだったら彼が浮気したら、彼殺してあたしも死ぬけどね?」

「クウ——ロオオオオエ?? あんたは励ましたいの、焚きつけたいの? どっちいいいい!!!」

「フツ……私とした事が、見苦しい所を見せてしまったな。なに、もう問題無い。いつまでもこのような事で気落ちするような女々しい女ではないぞ、私は」

エスデスが、おもむろに背中の中の何処から取り出した物にクロメは注視する。

「……包丁研ぎでしたけど、どうするのそれ?」

「む? か、体が勝手に。これは夕飯の食事の為にだな」

「あんた基本、水しか飲まないでしょ?」

「さ、あんた達用が済んだらさっさと帰るのよ? アタシは彼への手編みのマフラー作る

ので忙しいんだから、ね！」

セリユーは有り得ない光景を見る目で、

「……え？ええええええええええ？居るんですか？か、彼氏さん？」

「何よ、いちや悪い？まああ、まだアタシの片思いだけどく必ずうふふふ」

エスデスは色々おかしな駆動音を鳴らし始め、

「く……片思い……報われぬ思い……ふふふ……」

「あゝあああ、とにかく、今日は家に帰ってゆっくり休もう、ね？」

ギシギシ音を鳴らすエスデスを家まで無事送り届けたセリユー達、

「ああもうJKには重すぎる悩みだよ……こういう時って何処に相談すれば良いんだろ？警察、人生相談室？うちのお父さん、いつも仕事で疲れてるからなあ……難しい事なんか言わずにゆっくりしてほしい……」

「もうくしようが無いなくセリユーは、あたしがお姉ちゃんやお父さんに相談して上手い事どうにかしてあげるから、任せなさい！」

「え？本当？クロメが頼りになるなんて初めてじゃ無い？」

クロメの家、夕飯時。父・ブドーが食事の用意をし一家三人で食卓を囲んでいる。

「クロメ・・・年上は敬うものだぞ？私は姉だぞ！」

「お姉ちゃんこそ、後輩に譲るっていう、年上の貫録見せてよ？それあたしが取ろうと思ってたソーセージ！」

箸でチャカチャカやり始め、次第にチャンバラへとエスカレートしたその時！

「ぐ・・・!!」

「ふにゃん!!」

父の鉄拳が頭上に彗星の如く振りそそいだ。

「お前ら歯あ食いしばれ！」

「いやいや、お父さん、もう殴ってるから!!」

「屁理屈抜かすな!!」

「そうだぞ、クロメ!!」

「お姉ちゃんのフアザコン!!!」

翌日、学校の教室で

「・・・って事が有ってね？姉貴は外面だけ良いんだよ、別に肉の一つや二つねえ？父さんだって父さんだよ？普通男親は娘に甘いのに、なんで容赦なくゲンコツふるうんだろうね・・・は!?きつとあたし本当はあそこの家の子供じゃないんだ・・・ね、どうしよ

うセリユー!?!」

「・・・で、クロメ・・・さん? 昨日の話は?」

「え? どうしたらお姉ちゃんを更生出来るかだっけ?」

セリユーはコロを使ってクロメの横つ面をビンタした。

「ぐふ!?!・・・ぶ、ぶったね? お父さんにだっつてぶたれた事ないのにい~~~~~~~~」

教室内にクロメの悲痛の叫びが木霊した。

無敵は素敵

「ねえ、あんたとアカメさんってどうして同じ学年なのにお姉さんなの？」

「それは姉貴が4月生まれで、あたしが3月の早生まれだから・・・小さい頃は年上

だと思ってたけど、同学年じゃん？ま、小さい頃の名残でお姉ちゃんって呼んでるけど」

「なるほどねえ〜」

「きゅねえ〜」

クロメとセリユ、コロは話しながら家庭科教室へ向かう。

「セリユー今日部活は？」

「今日休み。」

「ねえあんた？結構さぼってない？」

「違うよ！クロメの居ない所で毎日あたし頑張ってるから、何言ってるの？」

「ま、良いけど・・・さあて今日は何作ろう・・・、誰か居る？」

「?・・・他の部員さんかな？」

教室のドアから差し込む筈の光が無く、どうにもおかしい。

「カーテンでも閉めたの？ 全く暗くしてどうするつもり？」

クロメがドアを開けるとそこには

「くくく……ふふふふ……」

室内のカーテンを全て閉め、蠟燭一本だけ灯し……包丁を丹念に研いでいるエステスの姿がそこに遭った……。

クロメは巻き戻しのようにドアを締め、

「よし！ 今日解散！」

「ちよ!! クロメ！ エステスさん何かやってたよね？ 何か摩訶不思議なことしてたよね？」

「エ？ ワタシナニモミテナイ？」

「とにかく、何とかしないと！」

「セリユー!! あれきつと、包丁持って、恋敵的な人に何かするつもりだよ！」

「そ、そうだよね？ ほらあれきつと、『この包丁良く切れるんです……良かったら使つて下さい！』って」

「なるほどね〜『あら〜奥さん〜こんな良い物頂けるなんて〜いつもすみませんね〜あ、これ詰まらない物ですけど、皆さんでどうぞ〜』って、話になる訳ね〜……つて、なるかああああ!!」

「じゃあ、最悪のパターンなら止めなきゃ!!」

「止めるってどうやって止めんの？人間離れたロボットのパウワアよ？あの前世は拷問ラブな凶悪な顔した人（？））どうやってとめんの!!」

「こういう時こそ、無双してくれそうな凄い人連れて来てよ！そうだ、ウェイブ君は？」
「あいつは、別の高校よ？瞬間移動でもない限り無理でしょ!!あたしまだ死にたくないよー」

「あたしだって!!……ど、どどどどうしよう……刃物持った人相手に……くっ……、
一かバチか説得してくる！」

「セリユー!?!」

「だ、だ大丈夫だよ、ほら？きつと危ない理由じゃなくて、儀式的な何かとか？」
「きゅきゅきゅいい!!」

コロがセリユーの足を掴み、後方を指差す。

「いやあく失敗失敗、うっかり忘れるなんて僕はドジだなあく」

白いマスクを被り、上半身の学生服が破れんばかりの巨漢がやってきた。

「ボ……ボルス君？」

「あれ？君達は確か……セリユーさんにクロメさん？」

セリユーは一旦気を取り直し、彼と対応する。

「え．．．ああ．．．、ボルス君はどうしてここに？」

「うん？ ああ．．．家庭課室に教科書忘れちゃってねえ、君達も忘れ物かい？」

「え？ ええくとそのと」

「あ！ 噂で聞いたけど、君達校内の面白い人を探してるんだっけ？ ごめんね、僕はそんな面白くない人間だけど．．．でも、面白いと思ったのかい？ いつだったっけ？ ちよつと離れた所から長い間見られたけど．．．その、恥ずかしかつたからもう勘弁してね？」

『あ．．．この人あたし達尾けてたの、モロばれだったんだよね』

クロメは悪い人探して、尾行した事に感づかれた時の事を回想している。

「と、とにかくボルス君、今入っちゃ駄目!!」

「え？ 先生でも居て何か話しているのかい？ 困ったなあ、明日テストだから早目に勉強したいのに．．．悪いけど、直ぐ終わるから謝って入るよ」

ボルスはドアを開け、室内の異様な雰囲気も気にせず．．．

「えくと、やつぱりあった．．．あれ？ ああ、何かの取り込み中かな？ ごめん、忘れ物取って直ぐ出るからね！」

そう言つてボルスはエスデスの後ろを通ると、

「おい．．．．貴様、私の間合いに無断で入るとは良い度胸だ．．．くくく、肩鳴

らしに丁度良いだろう……」

「え?」

次の瞬間、エスデスの強烈な針の如き蹴りがボルスを刺す。

彼は吹っ飛ばされ、入って来たドアを破りクロメ達を過ぎ去り、廊下の壁へと……。

「ボ、ボルス君!!」

「な、何が起きたの一体!?!くっ……セリユー、コロ行くよ!」

「ま……待ってくれ……君達が入つちやいけない……僕が行くよ……」

二人と一匹は何故?と振り返ると、そこにボルスは上着の学生服を破り、悠然と立っていた。

『え?は?……え?』

「今のは流石だったね……僕も油断してたよ……中々良い攻撃だったよ」

ボルスは教室内へと入り、その後ろ姿を後方の彼らはドアだった所から固唾を呑んで見守った。

「ほお……今のはほんの小手調べだったが……やるではないか?」

「君、名前は?……そう、エスデスさんか、何故こんな事を?」

エスデスは哄笑し、

「私にはやらねばならない事が有る、例え恋敵が居ようとも……例えこの身が朽ちんとも……彼の彼シャツをくんかくんかせねばならんのだ!!」

『格好良く、最悪な事言ってるしいー』『きゅい!』

「なるほど……君には君の信念があるんだね……だが、僕には僕のやらねばならない事が有る……退いて貰うよ!」

『『そこ納得しないで、もつとツツコンでー』』『きゅい!』

「ねえセリユ、あたしとんでも無い事に気付いたんだけど、どうして他の皆この辺に居ないの?」

「そういえば? そうだね、先生達呼んで来よう!」

「待つて! ひよつとしたら、このままいけばボルス君……エスデスの異常さにロボットだつて気付いてくれるかも?」

「え? ひよつとしてそれって……」

「そう、それはつまりエスデスの事で頭痛い仲間……もとい、秘密を知ってる仲間が増

『それはひよつとして、わざと言っていたりしませんか?』『・・・』

「ふっ・・・、こう見えても私は今では只の女学生だぞ?」

『『居ないと思うよ、貴女みたいな女学生!!』』『きゅい!』

「だけど例え相手が天才でも、負ける訳にはいかないよ?はああああああ」

ボルスの肉体は隆起し、より強力になる。

「ふうく・・・、今の僕は80%つて所かな?この姿を見て、病院送りになっていないのは、後ろのセリューさん、クロメさん、コロ君・・・そして、エスデスさん・・・君だ・・・けど、少しお灸を据えてあげるよ」

「ふっ・・・面白くなってきたぞ」

ボルスは拳圧を繰り出す。エスデス後方の窓ガラスを数か所粉々にし、教室内に明かりが差しこむ。

「・・・やるねえ、今ので微動だにしないなんて・・・」

「面白い攻撃だ・・・だが、私には通じんぞ?」

『ど、どういう展開なのこれー！ー！?』『』……』

ボルスは指を弾き、見えない空気の弾を撃つ。

「ぐ……がは……なんだこ、これは……」

「……僕は自分から女性には手を上げない主義だけど……空気位なら掛けさせて貰うよ……」

「女性には手を上げんだと……ふっ……私を女だと思うな……!」

「……確かに君の強さは、人間離れしているよ」

「私は最早……人では無い……」

『『え!?それってひょっとして自覚してるの??』『つきゆい!』』

「恋する乙女は、人の力をも凌駕するのだ!!」

『『やっぱり違ったかあー、って色々ツツコミ追いつかないー!!』『』……』

「そうか・・・成程、そういう事だね・・・君の目を覚まさせる為に、ちよつときつ目をお見舞しよう・・・」

「来るが良い・・・私も死力を尽くそう・・・」

「じゃあ僕は明日のテストの為に・・・」

「私は自らの（くんかくんかする為の）信念の為に・・・」

「ごや・・・尋常に・・・勝負ー!」

「・・・ちよちよちよつと、どうすんのおせりユー、早く止めさないよ!!」

「無理無理無理無理!!あれはもう色んな意味で無理だよー!!」

「あ、あたし達無力な民は・・・強者の戯れにただ我慢して見てるだけなのね・・・ウエイブ・・・もう一回だけ・・・」

「うん・・・あたし今まで楽しかったよ・・・」「きゅい・・・」

「あれ?先輩達、何してんすか、こんな所で?」

2人と1匹が振りかえると、そこには2年生のタツミが立っていた。

「な……この匂いは……」

エスデスは即座に場から離れ、教室外のタツミの元へ駆け寄った。

「タツミ……タツミ……タツミ……」

「どうわあああああ!!」

エスデスに抱きつかれ、タツミは廊下へとへたり込んだ。

勝負を中断されたボルスは、それ以上何もする事は無かったが只、エスデスに対し『最後の動きは速かった……』と。

「ンもう！タツミきゅん、もう離さないんだからな！恋敵が居ようと関係無いんだからな？何故なら私達は前前前世からの付き合いなのだからな!!」

「え？は？え？だだだだだれですか？貴女は？3年生ですか？だ、誰か説明して下さい！」

タツミは顔を真っ赤にしながら、狼狽するが振りほどこうとはしない。セリユーとクロメとコロは顔を見合わせ、取りあえず一難去った事は自覚したが、

「えくとね……この人は」

「3年生の変態ストーカーお姉さんよ」

「クロメ!?!」

タツミの一言に、クロメもこの時ばかりはもう何もツツコムまい、と思った。